三國七高僧傳圖會

天竺之部 卷一

全六冊

七高僧傳

波 605 1

東京都立中央図書館蔵書

特
605
F6

三國七高僧傳圖會 全

萬延元庚申歲夏新版

皇都

書堂合壽藏

大慧汝應知 善逝涅槃後
未來世當有 持於我法者
南天竺國中 大名德比丘
厥號爲龍樹 能破有無宗
世間中顯我 無上大乘法
得初歡喜地 往生安樂國

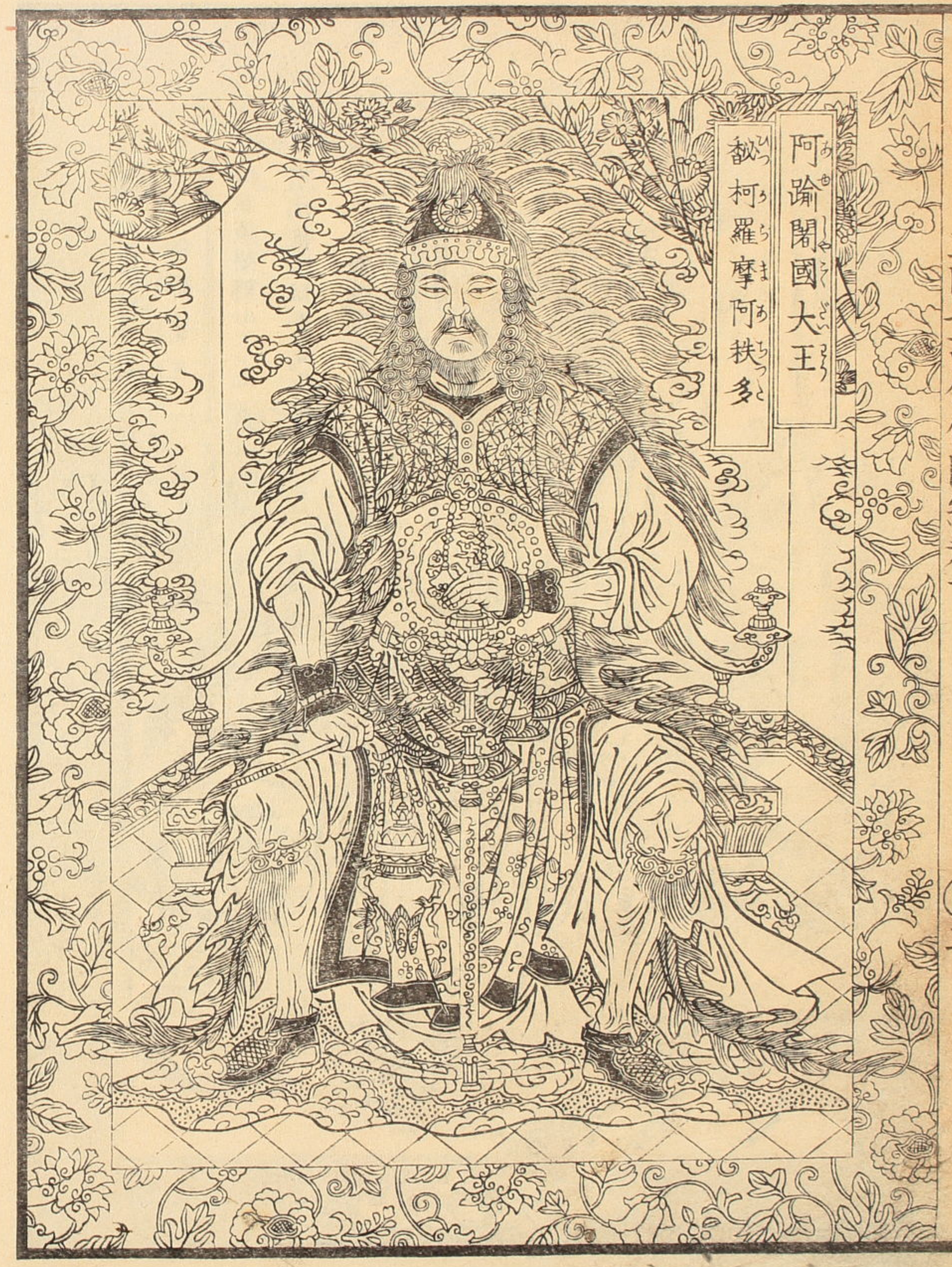
沙羅樹寫真

龍樹大士
其母樹下生之因字阿周陀
那阿周陀那樹名也以龍成其道故以龍配字号曰龍樹

外道婆羅門

頻闍訶婆婆
住頻闍訶山外道也
婆婆譯爲住

毗利沙伽那龍王
住在頻闍訶山下池中此龍王恒變身作仙人狀貌住葉屋中


阿踰闍國大王
𢬵柯羅摩阿秩多

天親菩薩
梵語云婆藪般豆或云婆修槃陀北天竺富婁沙富羅國師婆羅門嬌尸迦跋婆也

蜀賞國守護
夜刃神

頻闍訶山變石
夜刃神女稠林

三國七高僧傳圖會總目録

天竺之巻

○龍樹菩薩

第一 印度梵字四種並諸傳異説

第二 釋尊於楞伽山説未来記

第三 龍樹大士發心因縁並術家求隱身法

第四 四梵士入皇居侵淩宮女

第五 大龍菩薩以深奥經典授龍樹

第六 龍樹於南天竺弘佛法

第七 龍樹與婆羅門諍術

第八 龍樹破有無見弘大乘無上法

○天親菩薩傳

第一 婆藪般豆生北天竺富婁沙富羅國

第二 毗搜紐天王靈驗

第三 阿僧伽上兜卒陁天諮問彌勒菩薩

第四 迦旃延子罽賓國請馬鳴尊者

第五 頻闍訶婆婆就龍王傳外道法

第六 天親破僧佉論雪師之恥辱

第七 悔先譽天親造大乘論

震旦之巻

○曇鸞大師傳

第一 南北両朝歴代

第二 曇鸞達梁朝謁武帝
第三 逢菩提留支曇鸞燒仙經
第四 魏帝崇曇鸞葬秦陵文谷
第五 現龍樹見曇鸞 並 鸞師化度風
道綽禪師傳
第一 道綽到石壁谷拜鸞師碑
第二 善導入定拜彌陁問師往生
善導大師傳
第一 善導入經藏探有緣經
第二 善導夢見淨土諸相並諸說
第三 善導入滅異說並屠兒京室藏捨身往生

本朝之卷

○源信僧都傳

第一 源信幼稚感靈夢並從旅僧登北嶺
第二 源信布帛餽母却蒙諫言
第三 謁空也源信問淨土往生
第四 源信遇母歸終 並撰往生要集
第五 朱仁聰見源信驚嘆博覽
第六 多田滿仲發心 並迎接會修行
第七 平維茂都文士等逝去
第八 源信入水想觀 並賀茂明神靈異
第九 源信遷化奇瑞
第十 往生要集三叟六道之說
第十一 源信自画自讃文

○源空上人傳

第一 漆間時國祈觀音設一子並先祖家系

第二 勢至丸匿竹間暗射雙雲

第三 勢至丸登菩提寺學佛經

第四 阿闍梨源光試奇童

第五 勢至丸祝髮受大乘戒

第六 圓明就叡空諱更源空

第七 源空闡揚淨土丕弘眞宗

第八 東大寺大佛再建重源任大勸進職

第九 於上西門院說戒並小蛇生天上

第十 遠州櫻池來由

第十一 於大原勝林院源空論諸宗碩師

附録之巻

○聖德太子傳

第一 厩戸皇子降誕靈瑞並幼稚奇異

第二 蝦夷冠東鄙並魁帥綾糟感恩歸欵

任那再興太子議論並秦河勝之傳

第三 河勝奏日羅素姓並吉備羽嶋渡百濟

日羅來朝謁太子並太子觀日羅相示釵難

第四 日羅密奏良策並德爾余奴刺日羅

日羅怨靈覆恩卒參官等船

第五 用明帝即皇位並勅召沙門豐國

佛法渡本朝來歷並佛法興廢歷代

第六 物部守屋企叛逆並主上崩御

第七　守屋與官軍戰渋河　並守屋大連滅亡
第八　本朝女帝摂政之権輿　並太子紹營四院
第九　太子定冠位十二階　並憲法制十七條
帝請太子講勝鬘經　并太子諸州爲凶年之備
太子薨斑鳩宮　並葬科長御墓
驪馬悲鳴斃　異鳥棲廟上守墓
惠慈與太子今日逝

目録畢

第十一　重衡請源空授戒　並於南都被誅
第十二　維盛粉川寺謁源空　並奉法華經受戒
第十三　東大寺供粮並學迦功德議論
第十五　明遍僧都夢想　並蓮臺野髑髏供粮
第十六　於女院説戒　並免免畜業生天上
第十七　耳四郎悔先非帰佛門　並範長發起
第十八　於仙洞諸宗碩德談聖道淨土二門
第十九　顕眞法印遷化　並霊山寺不断念佛奇異
第二十　後白河法皇崩御
第廿一　源空在霊山修不断念佛　並異光照堂内
第廿二　東大寺大佛供粮　並俊乗房重源之傳
第廿三　津戸為守問有智無智教化差別

第廿四　源空於月輪殿談義並熊谷直實之傳
第廿五　因月輪殿請源空著選擇集並庵室房籠
第廿六　三井僧正公胤破選擇集並燒淨土決疑抄
第廿七　桓舜僧都閣聖道歸淨土法門
第廿八　明惠著摧邪輪破選擇
第廿九　雲朗僧正詰選擇並山門蜂起
第三十　南都北嶺再敒訴並源空處流刑
第卅一　山王猿春日鹿怪異並源空勅免
第卅二　源空於大谷入滅並勢觀房因緣
第卅三　波畫堅者破選擇並台徒壞廟堂
第卅四　粟生丘茶毗尊骸並勅賜尊號

總目錄畢

三國七高僧傳圖會天竺之卷目錄

龍樹菩薩傳

第一　印度梵士四種並諸傳異說
第二　釋尊於楞伽山說未來記
第三　龍樹大士發心因緣並術家求隱身法
第四　四梵士入皇居侵凌宮女
第五　大龍菩薩以深奥經典授龍樹
第六　龍樹於南天竺弘佛法
第七　龍樹與婆羅門諍術

第八 龍樹菩薩破有無見弘大乗無上法
天親菩薩傳
第一 婆藪般豆生北天竺富婁沙富羅國
第二 毗摟紐天王霊験
第三 阿僧伽上兜卒陁天詣問弥勒菩薩
第四 迦旃延子罽賓國詣馬鳴尊者
第五 頻闍訶婆娑就龍王傳外道法
第六 天親破僧佉論雪師之恥辱
第七 悔先僧天親造大乗論

三國七高僧傳圖會天竺之巻

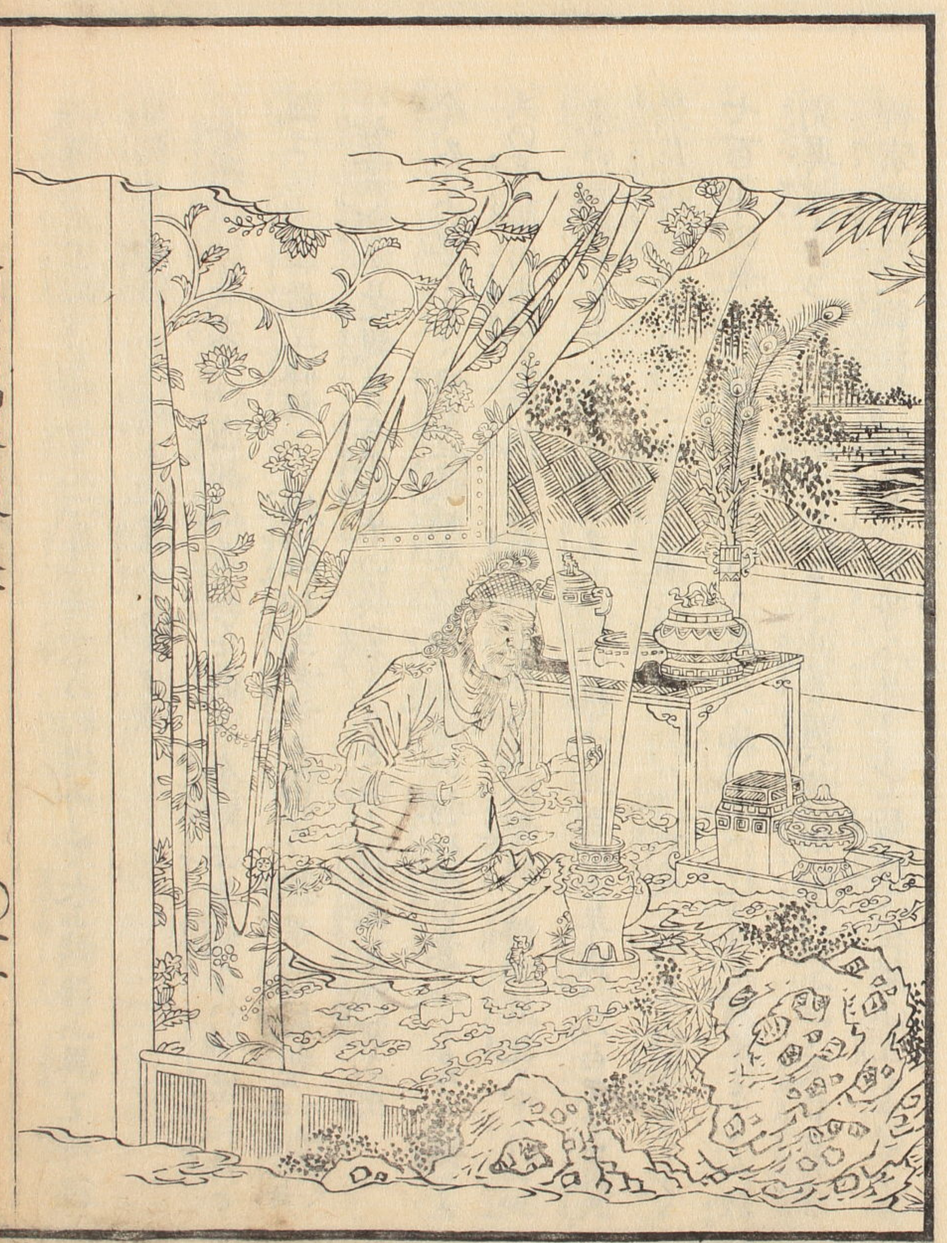
杓菴一禪居士編輯

○龍樹菩薩傳

大明没西山月光經之大聖釋尊化縁の薪盡なまして。拔提河の波と消え。沙羅樹の煙と立のぼると給ふとへども世々ふ高僧跡を繼て出現在し。衆生を濟度し給ふこと。偏ふ弥陁釋迦二尊の大悲。高僧相羨の鳴恩すり。抑龍樹菩薩ハ。南天竺憍薩羅國梵志の種大豪貴の家ふ誕生しなまふ

梵志とハ日本ふ於て源平藤橘の四姓の如く天竺ふて姓氏ふして一刹帝王氏二婆羅門梵志三毘舎平人工商四須陀農民都合四種あり。就中梵志婆羅門の種ふ。乙此菩薩の懸記本迹ハ經論ふ數出なり。凡楞伽經魏譯九卷唐譯六卷摩訶摩耶經下卷付法藏經五卷西域記八同十法苑珠林六十六卷十二門論宗致義記上三等其中ふ於て付法藏經楞伽經魏譯同うして旦詳すり。域記と義記と減相と記し。稍同かゝず。又景德傳燈録

龍樹朋友
と談らひて
隠形の術
を學ぶ
龍樹菩薩



一廿三傳法正宗記一廿四五燈會元一廿五等ハ禪家の別傳ヲて大ふ諸傳ふ異ア。佛祖
統紀五十八合糅ふて一傳とふて甚分らざとふ次
○金剛頂經義決上初九密部傳兼縁を載セ。金剛正智經ふハ如雲相佛と
說き。○大莊嚴三昧經ふハ徧覆初生如来と說ク。慧果阿闍梨弘法大師の師匠
ハ妙雲如来是觀自在王如来の異名なりと說く。釋論聖法記ふ出
今ふふ說ところハ姚秦三藏鳩摩羅什翻譯の摩伽經の意ふよるなり備ま
ふの菩薩の出現ふ異說あり。摩訶摩耶經と。涅槃經と佛祖統記ふ出れば如
来の滅後七百年の後とあり又中論の說ふハ五百三十年或ハ九百年とあれ共
法苑珠林六十六卷ふ玄奘三藏の傳ふ出れば佛滅後三百年ニ出世まし。
七百年の長生と保たまとあり。然れハ御一生の化導七百年をん欤。
尚異說まちくまれも略ふ然るふ此菩薩ハ諸宗の高祖ふて。天台真言
禪宗。華嚴三論。法相。淨土眞宗等ふ至るまで皆以て祖師ふ立ざるハなし

其来由ハ釋迦如来楞伽山ふまして。未来記と大慧菩薩ふ說クふ經ふ云
未来當有人大慧汝諦聽有人持我法於南大國中有大德比丘名龍樹
菩薩能破有無見爲人說我乘大乘無上法證得歡喜地往生安樂國
魏譯楞伽經第九總品一　唐譯第六偈頌品一同之
さる程ふ如来滅度の後。そるらの星霜と經て出世しまひ
龍樹菩薩と名けたまふ能外道の法と摧き有無の邪見と破ア大乘無上の
法と明しまふ其中ふ十住毘婆娑論と作て難行易行の二道と明し。弥陀本
願の法ハ唯他力ふて易行道なることと教へ又自ら弥陀十二禮の偈と作て
同施衆生生彼國とて淨土往生と懇ふ人まと勸ちん自も頭ひうふとさて
此經文の中ニ無上法といふハ宗風ふよりて無上法の一句と取て詳ふとあり。
夫龍樹菩薩ハ八宗の血脈相承の師なり故法相宗ふハ空識非無と說ぐると無
上法とと。三論宗ふハ假名回縁頭道無方の四種ふ立て勝義皆空と說ぐると無
上法とて。華嚴宗ふハ小乘教大乘始教大乘終教頭教圓教の五教と立てとぐも

己界佛界衆生界是三無差別と談ずると無上法と次法華宗ハ四教五味と立てども一心三観一境三諦と解を無上法とす。真言宗ハ顕密二教と立て顕教を遮情門と密教と表徳の法とす。父母所生身。即證大覚位と談ずると無上法と次禅宗ハ教外別傳不立文字と談ず。物と抱つくさると無上法とせり。斯の如く我修する所の法と無上法と諍へて九表記ハ〻く今の経文ハ往生安樂國とあれば无上法の詞まさしく念佛なり。故ハ欣求浄土の念佛宗ハ修する所の念佛往生と無上法とを。是誠ハ經文ハ宜し後學の人これを判ず。今私ハ云。華厳天台真言禅宗等ハ勝の義ありといへども易の義なり此故ハ無上法ハあらば又念佛宗ハ勝易の二義あり故ハ念佛の法ハ無上ゞ中の無上の法なり誰をかれと諍んやと云々

楞伽山とハ楞伽とのる城のある山ハ。夜叉の住居なりと地なりとのり。文類聚鈔蹄涔記云楞伽ハ城の名山と摩羅那山と名く僧伽羅國の東南にあり。心玄義ハ云梵ハ楞伽とハ此ハ難入とハ亦ハ嶮絶とハ復可畏とハ亦莊

嚴とハ。此摩羅那山ハ南海の中ハ孤峙つ山岳ハして其山削し如くなる故ハ嶮絶と名く山の頂きハ城あつて四圍ハ戸扉なく唯神通ある者空を飛行して下至入る方ハ其中ハ頂ぞる故ハ名づけて此城を難入とハ。羅刹中に居をもつハ復可畏と名く衆の實をかざるもハ復莊嚴とハと云々。

釋迦如来此山ハ於て説法しなハ其とき大恵菩薩とのる知識ありて。上首たり難ずて一百の問を立てるハ釋尊一々ハそれ答を審ハたまハ是を委く説宣たると楞伽經とハ。其中ハ未来記を説たまハ文ハ南天竺國の中に大德の比丘あり龍樹菩薩と名くべし能有無の見を破し人の為に我乗の大乗無上法を説き歓喜地ハ住し安樂國ハ往生せしめんと説なり有無の見とハ人ハ人ハ生れ虫虫ハ生死相續して常住なりと思ハ是有の見なり。又人を犬を炎をれば火の消たるごとく灰となりて土となりて迷も證も無きとなりと思ハ是無の見なり。此有無の二見より六十二の邪見を生もるく是皆九十

五種の世を穢をとある外道の教をうし夫を能破て尽して大乗の無上法を説て弘むとなり。我乗とは佛自内證の大乗法なり我物我教といふ同一四教義ふ云乗とは運載荷負の義へ牛馬なと乗て我思ふ處ふ至へき料なり運載とは乗物ふ乗じて道と運びて行義なり。聲聞は四諦を乗物〳〵支佛は十二目縁を乗物とし此二人は四諦十二目縁の船ふ乗て分段生死の愛河を渡りて但空法性の彼岸ふ至るべき也。菩薩は六度を乗物として生死の愛海を渡佛果菩提の彼岸ふ至るべきなり也。但天台ふ〳〵べ菩薩ふ四教の不同あり。藏通の菩薩は二乗とおなじく分段生死の河を渡るべ別圓の菩薩は分段變易の二種生死の愛河を渡るべし。四教ともに菩薩は佛果をとして彼岸ふ踰べき也云云是故ふ乗の字を與るなり。又大乗小乗といふは人ふ約し法ふ約する二の意あり。人ふ約する時は二乗を小乗と名ぶく自行限る故ふ其智力狹れば小乗とふ也菩薩は大乗と名けく。自行化他兼齊して観智廣大なる故なり云云

されは大乗は佛の内證智とて聲聞ふそを菩薩なりとを佛より外ふ知ての如智恵のことを内證智とのつり大経ふ所謂佛智不思議不可称智等の五智の事なり。無上は二乗勝たる上もるる法とりをとを龍樹菩薩南天竺ふ出現して有無の邪見を破て大乗の上もるる法を説教て歓喜地ふ住せしめ安樂國ふ往生をきしるそと釋尊未来を察して説なくて歓喜とは身ふよろこぶを歓とはこころふよろこぶを喜とのふ。獲べきをきを得んと思ひてよろこぶを歓喜とを有偖此龍樹菩薩發心出家の由縁を尋るふ天竺月支國とは西域の中の南國へ其國五分ふとそう。東天竺西天竺南天竺北天竺中天竺あるせて五天竺と号ふ。その南天竺憍薩羅國なる梵志の種大豪貴の家ふ生まれひて名を龍樹と称を其母樹下ふ於て平産をもを〳〵阿周陁那と字を阿周陁那は樹の名なり。龍を以道を成をるの故ふ龍をもて字ふ配して号して龍樹と曰とを〳〵或は龍宮ふ入て〳〵て成道を得るふもて龍樹と号をと統紀ふ見えをり又龍勝と号す共云り。天聰奇悟事

龍樹の徒宮中ふ忍んで殺害せゝる
帝王
龍樹
隱形徒
隱形徒

不再告と有て。天聰く萬事と奇く悟て聰命叡智にして何支ふる所一回聞其義理と明らめ聊と忘たまふことなし。いまだ乳と食と餔るの中より。諸梵志の四圍陀典外道の書籍を誦を聞たまひて。三十二字づゝ偈文四萬頌を悉誦じ覚え。其義理と心に領し明らめたまふ。尋常の人なりせば。十歳已上のこれらと。暗に諳ぜんことかく。假令そこに誦ぜんことを。畢竟鵡鵒の心経を讀ん有しく。爭それ甚深の句味とあさまし識ることあんや。今龍樹は幼稚にして十二萬八千の文字と宙に會得し。ちつとも忘れざる。其ふる義理とあきらめふと誠に安養久住の菩薩。大慈大悲の方便なりとおもひてゐるべし。二十歳の頃と。いらうて五天竺と巡歴く天文地理易學および諸の道術等殘所なく學得く。天竺廣しとへども誰りて是に續く者なく其名四方に轟り。おれども天竺は所謂大國なるゆえに此彼に竜樹に彷彿の朋友三個あり。是亦頗豪傑なり。一時の契友會合し。相談して曰。既に天下の義理にひて神明とみるべき幽旨を悟るべき者のこれ吾等これと尽せり。此上の何とかして自娛とせん。身に歓楽と究るの余あるべくば。夫は人情と慾にして色欲と究て一生の楽をなんぞ。さらなる吾諸梵志同士の徒にして。一國の王公にあるべれば。思のまゝに栄華と究娯楽をなすこと難し。所詮身を隠しての術と學びて王宮に忍びて。自由に出入して。娯楽ときこゆべし。四個りこれと談ひつ。相連立て其術家に至りぬる。此隠身の術と云へ。俗に忍術とへる類まして游偵諜者細作邏候探伺間諜以上左傳の注に見えて。皆忍者のこと。五雜組云漢時解奴喜張貂とか隠淪出入とるに門戸に由らず。此後世遁形の祖なり。介象左慈于吉孟欽羅公遠張果之流および晉書の女巫章丹陳琳等の術皆是に本づく。謂く神仙と。其實は非なり。其法五ちり曰く金遁曰く木遁曰く水遁曰く火遁曰く土遁其物とこれ則隠べし。惟土遁最捷なり。蓋し處とりて土るきこと無故。須く遁神と煉ること四十九日。空山人無の中に於く獨坐結念をべし。更に符咒あり百神と役ひ若一念の妄起をば便重て煉ぶし。即大明に

令譲と云者あり字は啓敬人を導きて大倉庫に入。支發されて逮られ。飲を求め即跳く瓶の中に入。撲破て庁々皆應。而く竟に所在を知らず。此水道の者也。正德年中老翁太監を流賊に脱しまれあり。又髪髻と鐘一土を一塊握て遂に見えず此土道の者也云々

龍樹と云る三個の朋友。志のひやうに同伴し。其術の師たる家に至て禮を厚くして其術を学ばんことを乞。時に彼術師なる人はくくと慮るに。此四個はこれ今天下に奮て雙なる輩にして名を世に擅にし。世の人を塵芥の如くに。爭我に家に腰を屈く来るべき者にあらず。此諸梵志は明世に絶たるも未我術を志ざす故斯の屈辱もとめられる。我し今速に法を授けば。必我を棄て復来ることなし。先且これ藥だかりを与へて法を傳ることを待へし。然れば藥尽るときは必ず来るべし。斯るに長く吾を師とし尊敬とし善哉と心を決し。青色の丸藥と取ぶし。各一粒づゝ教て云。足下等此丸藥とは人を極りく

静なる處に引去り。水を以てこれを磨ぜし。各眼にぬりなまこぶし。然るときは人中に出ることを怒に教られば。四個大に悦びて。厚くも禮を謝し。藥をとりて王城に入ん事を議しける。茲に龍樹は其丸藥と器に入。水をもつて磨つぶすに。其香氣と嗅ぎて志ざらしく考へ遂に此藥其數七十種にして何々をもつて調合する處なり。尤其分量の多少に至るまで悉く鑒察ある。是にして再彼術師の許に行て此由を語るに術師大に驚嘆し。問云く足下何に由て此藥の方を詳にするや。答云藥自ら夫々の香氣あり。何をもつて知さんや哉。師云く嘆伏し。僅に一二種の藥くらべ。其味ひ分量まで飲分る者有べしと。斯の如き人に之を問も猶くし。而るに況や相遇とも。吾賤き術をんぞ惜ひ足んや。なを隱ることを何の詮る事なりとて。其藥の製法方端具に授けしと也。龍樹はいとぞ隱身の術を傳て得く。三個の朋友にも委く授け。諸共に王城に行る。女官の室に忍び入る。原本を見姿見えざれば。許多の禁門にも出ひるとめる。

心おきすして后宮女の房々ふ到りて。宮中の美人と妾く侵し。色欲と慾ましぬふ然るふ百余日の後。女宮の下陳ふおいて懐姙の人數しく。如何なる譯といふを知らんと。女宮の面々只管ふ愧おそれとらんと。匿ふまふ〳〵種々評議の上終り止事なと得ど其旨帝王へ奏し奉るふ。帝大ふ驚ろかせたまひ。此何の不祥ふして斯怪事と為哉と。叡智の臣下とめして何者の所為なるぞと穿議するふ。一個の老臣進み出。謹で奏ぎ申す。凡斯のごとき奇怪ふ二種あり。一ふ鬼魅。魍魎。狐狸の類ひの所為あり。亦一ふ方術と言し。身を隠をの術と以て。忍ひ入事あり。是と調るふ諸門の内ふとまるる砂と布き嚴〳〵監人と以て護らしめ。鬼魅の類ひふ候ば。その足跡有べし。隠身狐狸の業ならば必〳〵と足跡現るべし。鬼魅等の所為ふ候ば術とをつて是を滅さべし。人間の所為なりせば。兵士とをつて是と退治すべし。叡慮悩ましたまふれとも奏し申す。帝と初め許多の群臣實ふりつとも同じく。鬼魅降伏の術者と招き。又力士數百人と備へ諸門の内ふ白砂とし法と

揃へて待たるしが。案ふたがはず四個の足跡庭上ふあらはれる。驚破曲者ぞ。ときの號とをつて四方の諸門と堅めし。勇臣許多宮中ふ走入劍と揮て的と定めず上下左右縦横無盡ふ殿中の隈々隅々空と伐て廻り程ふ。何ぞはいてたまるべき。さしも隠身の術と得る徒と。透間あらず伐たられ即時ふ三個切殺され忽ち形容とけいし。龍樹と其時危うしと素より智恵勝たまひし故帝王の側ふ寄そひ身体縮め氣と屏して坐しる。帝の仰せ七尺四方ふ劍と揮て。是ふ依て劍難と脱き奉き命と助るふ。こは初て熟思惟しふ。誠ふ婬欲ふ是苦の本なる好色ふ是禍の根なり。德と敗て身と危うしと。ふ此より起る。有べきことふ。おそと怖ぢるひ。心ふ誓と立て曰く我ら今日の厄難と免るとと得ば。出家して佛法修ぶべし。と決定しるひしと。是と經ふ即自誓曰我若得脱當詣沙門受出家法と説る。遂ふ龍樹ふ此難とまぬがれ。宮中とおよび出く山ふ入一箇の佛塔ふ詣て出家受戒し。九十日の間ふ三藏經律論を誦ぜ

龍神
竜樹菩薩

龍樹龍宮城ニ
到て無量の
經典を拜ス

のひ。大小乘の深義を究め。尚其余み更ふ異る經りやあらんと。十方を索ひ求へ
ども。とべて得たまへところなし。是みうて遂ふ雪山み登りたまつみ。山中み塔
あり。塔の中ふ一個の老比丘あり。謁へて法を尋ねたまふみ摩訶衍經典大乘の經卷を
うて是と与ふ。龍樹さづうて既み誦し。其實義を知といへども。いまだ通利を得
ずして。故ふ諸國を周遊して只管餘經を求め。且閻浮提婆婆世界中をあまねく
求めうへども。曾て學びたまへべき經ふ。さる程み外道も論師も沙門も義宗
も咸く摧伏し。給ふ時み外道の弟子曰く。師ハ一切の知人う。今既ふ佛弟子と
爲ぬり。まうふ其道の足ざると。兼ひて足さると思ひ給ふるや。只一事足ぎ
ると。一切の智ふ非ざる也と。龍樹聞て答ふ辞ち。幾情屈したまへ此ま至て
忽邪慢の心を起し。ひたすら念ず世界中の法。其數太多し。原来佛經如也と
いへども利とうして之を推とれ。故いまだ盡さる所あり。それいまだ盡さる所と
我これを推て演てうして。後學の者を悟ちべし。理ふおひてなぞはざれども事に

於て失ちし。されい何の咎あんやと心と決しひ。即ちこれと行うと欲しなまへ
斯て龍樹の新み法を立めふ。先師たる者と見立てこれと重戒と教へ衣服と更へ
造う佛法ふ准ひて聊異ることと有しら。衆人み受學せうんと欲と。斯あり
程ふ日と擇時と選ぶ諸弟子み新ふ戒と授け。新なる衣と著せうる余て龍樹
獨静ちる処の清浄の水精房の中ふ在せり。其時菩薩位み住ぜられし大龍神
出現し。此形勢と見て數惜これと愍ぶ。即時ふ龍樹と侍ふて海中ふ入龍宮
城みいうる。宮殿中みおいて七寶の藏と。七寶の函と取いし。そろくの方
等深奥經典無量の妙法とうてこれと授く。龍樹これと受て讀誦すること九十
日。其經卷の數とうる多し。尤經説の心の深きと入て。實利と會得しうをいへども。
佛法の有ぐれと未眞實ふ領解したまへべ。其時龍神これと察し。而て問ていく。
足下看る所の經遍さ在いるや。龍樹答て云く。諸函中の經卷甚多く。無量う
して尽ことべし。今讀ところの經をでふ閻浮提ふ十倍せり。龍神の曰今是ふ見ふ

經のごとくに此宮中の諸處に藏せり。是其員と數ふべからず。則これを見せ進せんやそ
無量の經藏と云へるを見せむ。龍樹見たまふに是まで見々し所の經は百千万倍
せり。龍樹をどろく感嘆し。實に佛經の廣大言語に絶せると。其時已に諸宗の一相を得
て深く無生を入る。二忍具足をと云々かくて龍神は龍樹に佛道を得ゆるまふ頓て
龍宮城と伴ひ出る。閻浮提に送とりをる
五雜組に云。葱嶺の東の方。海に入ること五六日程に小嶋あり。闊さ百里余四面海
水皆濁る獨此水清く。風無して浪高きこと數丈。常に水上と見るに紅に光る
事日のごとし。船人敢て近付ぶ。云くこれ龍王宮也と云々。法華經提婆品に。文殊菩
薩海中に往て龍王の女を教化の事。ならび佛說龍王經等あり
時に南天竺の王諸國を順覽し給ふに。邪道を信用の沙門釋子一個を見る。夏
に得ること。國人遠近皆其王道に化す。龍樹はくく思ひ給ふ樹はその本を
伐ざれば傾ぶく。人王化せざれば則道行れずと。然るに其國の政法。王家錢をいだして

人を雇ひ行列の人夫とす。龍樹倖ひに此便をもちて。それ募に應じて人夫の將と
なり。戟を携へて前驅に列せり。其行列の倍と整へ部曲の次第と。ことごとく進退遲速
を指揮すること嚴かずして令行れ法彰れずして。衆卒隨ふ。支奇なり。國王之
を見て數喜びの問て宣く。是いかなる者ぞ。從臣答て言をす。此者催促す
應じ勤る處なり。尤扶持と食せば又錢財をもらへば。而して支に在ては恭く謹んで
勤ることを斯のごとし。其趣意何と求ち何と欲すると知らずと。王迫くして宣く。汝
是何人なるや。龍樹つらんで。我は是一切智人と答ふ。王甚驚きの而して問て宣
一切智人は曠代一ならび有て今有事と聞るに。汝自智人なりと稱する事何を
もつてこれを驗しるん。答て云く。智とるんと欲のべ。何ぞまれ問せたまへ。是
說奉るべしと。王即自ら念く。我は智主大論の議主なり。問て彼を屈伏せんを
安しとせども猶誓とすべし。問ふべんと彼誘らん。つぐはせんと良久く疑惑に猶預
しるひしぶ己と得ずして問ふ。天今何と爲哉。龍樹の言く。天今阿

修羅と戰ふと。王ちぐらく辭なし。其言と非とせん欲するふ復以て是体證とする事をし。又其支と是とをんと欲するふ事の明ひきものふし。故ふ王いまだ言を出し給はざる間龍樹復言此虛論とをんく勝を求るの諍ふあるぞ。帝須臾これを待せゆく。稍くその驗あるべしと言訖る時忽空中に干戈兵器あつて相係く地を蓋う王の宜く干戈矛戟これ戰器をりとらんべしと。汝何の故ふ是天と阿修羅と戰を支を知るや。竜樹いくく是と虛言をなすぐ。實事をとつてせんふ如どと。斯る折く阿修羅の手足指あるひ耳鼻ふ空ふ從て下る。又王ふひ臣民婆羅門衆とて空中ふ天と阿修羅の両陣相對するを見て。王乃ち稽首して龍樹を敬ひ其法化ふ伏す。殿上ふ萬の婆羅門あり。各束髮を切棄て成就戒をうけて弟子とるれりこの時龍樹南天竺ふ於て大ひふ佛法を弘め。外道の有無の邪見を摧破し。廣く摩訶衍大乘を明らふと。是則ち大上無上の弥陁の本願ふして自行化他を施しゆるり斯て竜樹い優婆提舍十萬偈を作て。又莊嚴佛道論五千偈大慈方便論五千偈

中論五百偈を作て。摩訶衍の教をして大ふ天竺ふ行ずむ。又無畏論十萬偈を作る。中論其中ふ出とこく

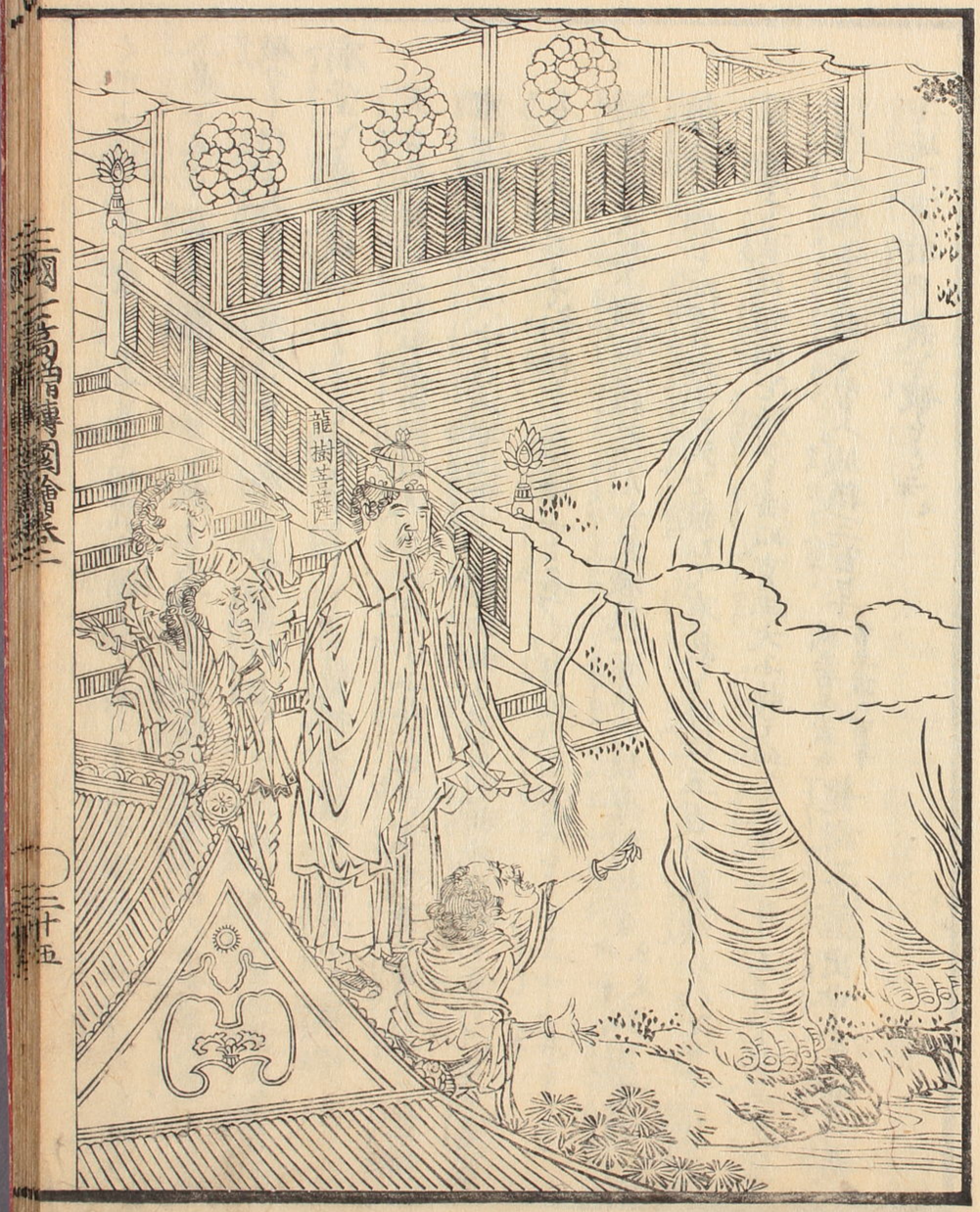
天台名目類聚抄ふ云。眞言宗ハ凡如来滅後六百余歳ふ中天竺の竜樹菩薩南天竺ふ往て鐵塔を開て。金剛薩埵菩薩ふ値く傳る處の法門なり。依經ハ大日如来。三世常住法界宮ふ於て說処の三部の秘經也謂る大日經金剛頂經。蘇悉地經也云云又三論宗ハ如来滅後。竜樹菩薩出世して。諸法皆空の旨を宣ふ。又青辨菩薩出世して。おをしく此旨を宣ぶ。此宗の根元なり。よつく天竺ふハ馬鳴竜樹提婆羅睺等弘宣ヤり。三部の論を以て。依憑とする也。ふ三論宗と名ぶくるり。一ふ中論四巻龍樹作二ふ百論二巻提婆作三ふ十二門論一巻龍樹作

偖て竜樹菩薩ハ十萬二十萬の偈を說て普く佛法を弘めたまふ。殊更國王帰依し給へバ。國中の萬民風ふ草のなびくごとく。佛法盛んふ行はれる。

一人の婆羅門震旦の道士のあり。能呪術を得て種々の奇瑞を驗をせり。かゝるゆへに龍樹は大に妬み。其術を行ひあひて勝劣を試ん竜樹を一時に取ゝ殺んと思ひ天竺國王に祈り申す。龍樹と術を爭ひて。弘る所の法の勝劣をきゝたゝき旨を奏聞を。王の宣ふ。汝が如き大愚痴の所為にして。爭ふ龍樹の所對となるべきや龍樹の智恵の明らかなることゝ。日月と光を爭ふが如し。汝これを崇敬して必ず敵をすゝめられと。婆羅門くゝて言ふ。恐れ〳〵大王御帰依あるゝ故に其善悪をもろ〳〵のさど。王はこれ智人なるゝ。何ぞ理をとゝて之をたゝかはしめ勝劣の分るゝとあんや。ぜひ〳〵術をとゝくべん事を願ひたてまつるに王も今は制し難ひて然らんと許べしとて即時に龍樹をめしひ此由をのたまひつ日を撰て竜樹と共に政德殿に出御あり。待受ける波羅門。後より来て此体を見より便ち殿前にあひて口に呪文を唱へれば忽ち大なる池を現し。清浄の水涌上て中に千葉の蓮華を生ず。婆羅門すゝむ。其蓮華のうへにうちすわり

大音をあげて言く竜樹今世に誇るとゝ汝は地上にあつて畜生に等しく我は斯清浄の蓮華の上に座したり。されば大德智人を〳〵。論義をなさんと抗言す。時竜樹は些と驚かず暫く呪術を行ひたまへば。たちまち六牙の白象現を出り。稍て大象はもづくと池の中に入る。婆羅門の乗る廣大の蓮華の軸を鼻をまきてくるゝと纏て引抜て虚空に投上げ大地にどと落しれば婆羅門は腰骨を折られ大に悶苦の頭をかゝへて誤まりて。竜樹に帰命していく〳〵れ我の量を知らずして。大師を辱しなんと欲せしを愚なれ。されば我を哀み其愚蒙を啓ひ給へと先非を悔て嘆れは竜樹いこれを哀みひ弟子に加へ給へり斯有て程に國中の外道の徒をゝく竜樹を信じ。上は國王より下万民に至まて龍樹を仰き。尊ばるゝとゝもに遂に大乗無上法を弘め。衆生を済度あるを。偖星霜多く移り変て小乗を信ずる一個の法師あり。常に竜樹の大乗を怨疾す。竜樹將に此世を去らんとて。而て此法師に問て曰。汝れ久〳〵

外道婆羅門


龍樹菩薩

く世に住すると雖も樂や苦や咎て曰實に願ふぎる所なりと。竜樹聞て頭て退き。閑室に入扉を立て在り。然るに日を經るといへども出給て次第の人々奇異に思ひて破つて内に入れと看れば更に在まさず。其行方を尋ねに故に南天竺の諸國其為に廟堂を建て敬奉りて佛のごとし。龍樹菩薩龍樹大士と稱し

天台教観時名目私鈔の解曰。大士とは大小に非る也。士は事也。運心廣大にして能佛事を建る故に大士と云ふ。亦上士と云ふ。瑜伽論に云。自利利他の行ること下至と名く。自利あて利他なくを中士と名づく。自他の行を具するを上士と名くと云

同書云天竺に論師の興起は凡如来滅後一百年の後摩訶提婆太夫鶏園に出世し諍論を興す。阿育大王大天を敬ひて有教を信じ。五百の羅漢なれと見て悲て目を擊て言次恒河を泝て去ぬ。育王大に悔て血を吐事一斗ありしを尚五竺の學侶煽ん有教を習ふ。滅後三百年或五百年或六百年或八百年龍樹菩薩出世して空の義と述て有教の義を破るとこそ

楞伽經の中に。龍樹菩薩の未来記に説く。證得歓喜地往生安樂國と云へり。歓喜地とは。初地の菩薩の名なり。新譯には極喜地と云へり。是則初地見道の位に初て眞無漏の智を得て。二空平等悟を開き自他利他して。大歓喜を證ずる故に歓喜地と云ふ。瑜伽唯識等の論に見えたり。案のごとく。佛の未来記に違ずと説き。初地の悟を得て極樂に往生して大乗無上の法付法藏傳に依るに。即龍樹は第十三の祖師なり。假に仙藥を餌して現に長寿三百余年佛法に任持とりの度とる所の人称て數ふべしと云々

讃彌陀偈曰。本師龍樹摩訶薩。誕形像於理顔綱。闡閉邪扇開正轍。是閻浮提一切眼。伏羮尊悟歓喜地。歸阿彌陀生安樂。譬如龍動雲必隨。閻浮提放百卉舒。南無慈悲龍樹尊。至心歸命頭面禮。

龍樹摩訶薩

○天親菩薩傳

天親菩薩ハ。北天竺富婁沙富羅國の人也。富婁沙ハ譯して丈夫とす。富羅ハ譯して土とす。故ニ譯して丈夫國とと。天親の父ハ此土の國師婆羅門なり。姓ハ憍尸迦と云。三個の子あり。三子ともニ婆藪槃豆と名く。婆藪ハ譯して天とと。槃豆譯して親とと。天竺の風ニして兒の名と云る支。同一名ととらてし。復別名と云ふとして〜各とれと分つるり。于時此菩薩の傳說甚多〜。其大概を言へバ

付法藏經六十○百論序疏十○慈恩三藏傳三初○西域記五十一○唯識樞要上本四○俱舍神泰疏一初○俱舍頌疏法盈序記初等の中ニ於て付法藏の婆修槃多今の婆藪槃豆と同異の論尚〜○如止觀證眞私記一本十諸文と引按ぜるふ。百論序疏。付法藏等の文と云ふ。實ニ疑ひと考るの一端〜○傳燈錄二十○正宗記一九○五燈一四十等。禪家の別傳大ニ諸傳ニ異るり○師子覺と以て今師の弟ととるハ。元の念常の佛祖通載五十七と推與す

蓋西域記と誤讀て此附會とつもり兼用とべし。○三井圓珍の法華論四種聲聞日記三右ふ唐の無慶和尚の弟子慧則の説と舉て曰。大日普賢を以て天親菩薩と名く。迦名釋迦尊と頭を又經と引と云々

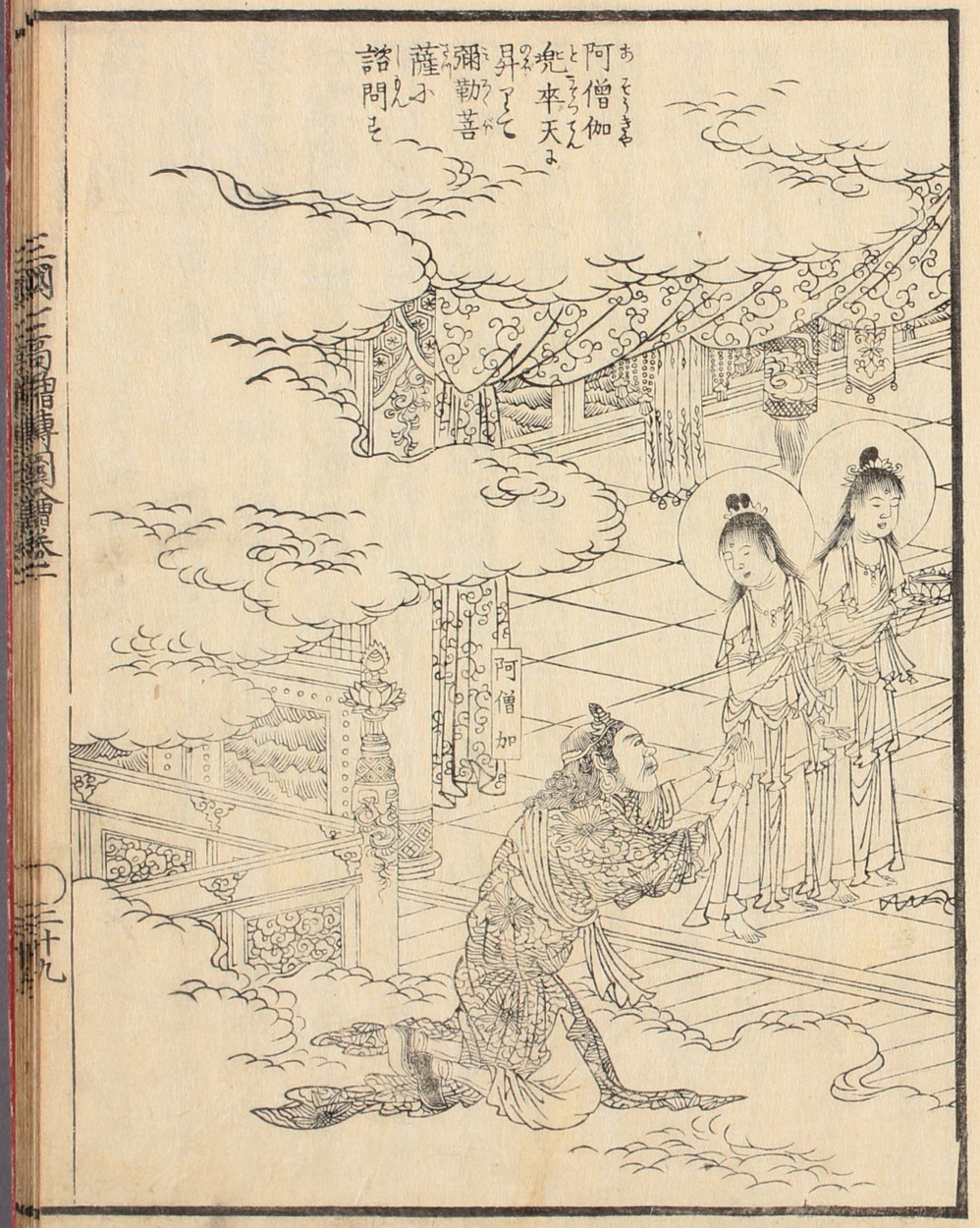
天親菩薩ハ釋迦如来滅後九百年ふ北天竺丈夫國ふ生給ふ。又小乗論ハ如来滅後千年とあり。御壽命ハ八十年の間の御化益なれば一千年の前後ふ或ハ一千百年の間なるべし。天親と梵語ふハ婆藪槃豆と云ひ。又ハ婆修槃陀或ハ伐蘇畔度。あるひハ和修槃豆と云ふ。扨天親と号ること。天竺國劫初の時毗搜紐天王帝釋天の父此土に来下して閻浮に生まれ。其德と感じ天王の像と長二丈ふ作り。廟を立ていとひこゝ婆藪槃豆と称す。諸人歩と運び此天ふ祈るふ諸願成就せずと云ことなし。然を天親の父母子無と愁ひ。此婆藪槃豆ふ祈誓とかけるふ。たちまち一子と設給ふ。されば婆藪槃豆とさだめるふ。兒なれば即兒の名とし婆藪槃豆と号くと也是をなち天親漢語ふて天ハ毗搜紐天の天と名づる也。親ハ親と訓ずる。諸人あまねくとゝびて

彼天王といのまべ。此天王ハ親の兒と親むゞくふ親こゝふ故ふ則彼像と天親と号ちるゝ。然るふ此天親の像ふ祈願して得る兒ちるゞ也ふ天親と号る也新譯の論ふハ世親とゝ。是ハ世の人の親近とる意ふ依て世親とゝ

或云梵語の婆藪ハ世ゝ。槃豆ハ親なり。天ハ梵語ふ提婆とゝきゝ

さる程ふ天親の兄弟三個なるゞ。其ふ婆藪槃豆と名く。ちるゝふ第三子の婆藪槃豆ハ。薩婆多部ふ於て出家し。阿羅漢の果と得る別ふ比鄰持跋婆と名く。此比鄰持とハ是其母の名なり。跋婆ハ譯して子とと。人畜通じて梵語ふ子のことを跋婆とゝふ。長子の婆藪槃豆ハ菩薩根性の人なる故ふ。亦薩婆多部ふ於て出家せり後ふ定と修して離欲と得。空義と思惟をれどと入ことと得ると能ゝべ。自ら身と殺さんと欲と。賓頭盧阿羅漢。東毘提訶ふあるて此事と觀見して遥ふ彼地より来て長子の婆藪槃豆の為ふ小乗の空觀と説く。教のおとくれと觀じて。即便入もとと得ゝふ。偖小乗の空觀と得るとゝども。意猶ゝべ安ゝどられふ

彌勒菩薩


阿僧加
あそうきゃ
阿僧伽と兜率天より昇りて彌勒菩薩に諮問せ

其理なり爾るべし。此ふ因て神通よ象ゝて兜率天ふ昇りて。彌勒菩薩ふ諮問と。弥勒菩薩渠ゞ為ふ大象の空観と説ゆふ。夫ゝ長子の婆藪槃豆ハ。閻浮提ふ還ゞて。弥勒の説たまひし如く思惟して。即便悟るゝと得ゆふ。其観念の時ふ於て大地六種ふ震動と。既ふ大象空観と得ゝり。此ふ因て名と阿僧伽と改ゆふ。阿僧伽ハ譯して無著といふ。深く小象と厭捨たるの義なりと。其後ゝゞ兜率天ふ昇りて弥勒ふ大象経の義と諮問と。弥勒そは為ふ廣く解説したまふ。阿僧伽ハ得る所ふ隨ひて閻浮提ふ還ゞて自らの聞処とゝつて餘人の為ふ説ゆゝ。聞者多く信と生るゝのみし。阿僧伽とふつら自ら發願したまふ。我今衆生とそ大象と信解せしうんと欲ゝ。願ゞ未ゞ成ず。此上ハ所詮弥勒尊ゝゝふ閻浮提ふ下りゆし。解脱したまふ如くとて又兜率天ふ昇りてゝゝと告たまふ。弥勒とゝいち其願ひの趣きと象引たまひ。夜の時ふいりて閻浮提ふ下ゝゆひ。大光明ゝ放ち廣く有縁の衆とあつえ諸法堂ふおひて十七地論（瑜伽論一百卷）を誦出しゆふ其誦ゆふ論ふ

隨ひ其義ふ解と。百二十日の夜と經て十七地論と解もるゝと方ふ竟る。同堂ふ於て法と聴聞ゝとい（ゝ）ゝ。唯阿僧伽一個のみ弥勒菩薩ふ近づゝと得ゝり。余人と遠ふ聞ゝと得るあり。夜ハ共ふ弥勒の説法ときし。晝ハ阿僧伽更ふ余人の為ふ弥勒の説ところと解釋と。此ふ因て衆人皆大象と信ず。弥勒菩薩阿僧伽教（日光三摩提と修せし）説ゝ修学して即此定と得たまふ。此定と得てゝり後。昔ゝ解せざる所悉く能通達と見聞ところ永く憶ゝ忘ず。佛いまし説ところの華厳等の諸の大象経悉く未ず義の解せざると。弥勒兜率陀天了於て阿僧伽の為ふ。其義と悉く解釋したまふ。阿僧伽一々ふ通達しゆふ後。大象経優婆提舎と造り佛の説ゆふ所の一切大象経と解釋したまひ。ちうれば上ふ出たるが如く第三子の婆藪槃豆ハ。別名と比鄰持跋婆ゝゝ。第一の婆藪槃豆ハ阿僧伽とし。第二子の婆藪槃豆とゝい是天親菩薩ふて亦薩婆多部ゝ於て出家したまふ。博学多聞ふして遍く墳籍ふ通ず。神才俊朗ゝて儔と

為へきりのふ。尤戒行清高ゝして以て相匹ぐ。茲ふ佛滅度の後五百年のうち阿羅漢あり。迦旃延子と名づく。母の姓と迦旃延とふ其母の姓ふ從て名とす。先ふ薩婆多部ふ於て出家す。本是天竺の人なるが。後ふ罽賓國天竺の西北にあり往て五百の阿羅漢ならび五百の菩薩と共ふ薩婆多部の阿毗達磨とふる小乘の論を撰集す。是と八伽蘭陀とふ譯して八犍度とふ五万偈あり。伽蘭陀ハ譯して結とす。亦節と曰謂義類各相結屬す。故ふ結とふ又義を摂して散せざらしむ。故ふ結とふ。義類おのゝ分限あり。故ふ節とふ。亦此文を称して發慧論とふ。神通力および願力とをもて廣く遠近ふ宣告もるなり。若先ふ佛の阿毗達磨と説と聞ば。得る処の多少ふ応じて送来るべしと觸もるなり是ふ於て或ハ人或ハ天諸龍夜叉乃至阿迦尼師。吒の諸天先ふ佛の阿毗達磨と説と聞あり。或ハ廣く或ハ略乃至一句一偈と悉送與ふ。迦旃延子諸の阿羅漢および諸菩薩と共ふそれ義と簡擇ふ。修多羅。毗那耶と相違背もれば即便撰録す。若相違背もれば即便棄捨ふ。是

取所の文句義類相關るふ隨ふ若慧義と明らもる則ハ慧結中ふ安置す。若定義と明らもる則ハ定結中ふ安置す。尚餘類悉く爾り。此八結と合て五万偈あり。既ふ八結と造り竟ぬ。時ふ又毘沙門と造て是と釋せんと思ひ。馬鳴菩薩と招請せんと談らふ。此菩薩ハ舍衛國婆枳多王の人なり。八分毘伽羅論及び四皮陀と六論ふ通じ十八部三藏と解す。文宗学府先儀の歸と所なりそ

起信論義記云馬鳴の名ハ諸の傳記ふ依ふ略して三釋あり。一ふ此菩薩初て生る時。諸馬と感動し。悲鳴して息ざるを以ての故ふ此名と立るなり。二ふこの菩薩善能琴と撫して。以て法音と宣ふ。諸馬聞て咸もどゝく悲鳴す。故ふ此名と立る。三ふ此菩薩善能説法したまふ諸馬悲鳴し涙をながして食せざること七日なり。是ふ於て名と立。菩薩とふハ具ことをとらへ菩提薩埵とをいへり。菩提と此ふ大覚とふ。即所求也。薩埵と此ふ有情とふ。即ち度もる所なり。境ふ從て名とす

馬鳴尊者ハ法を富那夜奢尊者ホ受て普く衆生を度せ。嘗て魔ありてきたりて
馬鳴と力をくらぶ。空中に忽ち一大金龍を現ぜ。威神を奮發して山岳を震動す。
尊者坐して儼然たり。魔の事隨て消失ぬ。七日を經て一つの小虫ありて。形
と尊者の座下ふくと。尊者の云是則魔の變ずる所ホして。吾法を盗聽の。
これホ告て云く。汝三宝ホ皈依せバ即神通を得んと。魔遂ホ本形ホ復り。禮を作
て懺悔す。尊者の曰く。汝ハ名ハ誰やいうる神力ありや。答云。我ハ迦毘魔羅
是則人ホして馬鳴ホ法を受て尊者となる
馬鳴ハ第十二祖迦毘魔羅ハ第十三祖
能くやや。否や。曰く何を性海とか。尊者の云く山河大地三昧六神皆これ由て
發現す。迦毘羅これ言を聞く心を悟ぜ。遂ホ剃度を求ぶ。尊者乃ち
偈を示して後入寂ぜ。馬鳴菩薩ハ徳ど唐土の住化ハ
問の顕王三十七年ニ住化ハ
斯く迦旃延子ハ人を舍衛國ホ遣りて。馬鳴菩薩を招請ぜ。馬鳴需ホ應じて
罽賓國ホ来臨ぬ。迦旃延子次第ホハ結を解釋ぜ。諸の阿羅漢ならび諸菩薩

即ち共ホ義の意を研辨ぜ。其義意ハ足ぬれバ馬鳴ホ讃ぶて即文を著ハぜ。既ホ
十二年を經て毘婆沙を作ぜ方ホ異ぬ凡百万偈ぬ。毘婆沙ハ譯して廣解とす
製述已ホ畢て。迦旃延子即ち石ホ刻て制を立て云く。今より後此法を學人ハ。
罽賓國の外へ出ることを得ざれと。是ハ此國ホて只管辛苦を尽し。八句の文句
及び毘婆沙の文句。其余成就ぜ。正法ハ。餘部および大乘のそれを汚し壞らん
ことを恐れて禁制を立て國王ホ願ふ。國王を又其意ホ同じぬ。抑此罽賓國といハ
四方の周繞山岳ありて城のごとく。唯一門ありて出入を。諸の聖人願力をもつて。諸の
夜叉神を摂して此門を守らしむ。若此法を學んと欲ぬハ則罽賓ホ来るとハ
谷ぬ。諸聖人願力を以て。五百夜叉神を檀越として。此法を學んを
あるを者ホハ。衣食および調度諸式ホいるまで。更ホ乏しきと無しらんと法
令を立ぬる。茲ホ又阿踰闍國の二個の僧あり。婆婆須跋陀羅と名く。聰明
大智ホして。聞ハ即ち能持つ。それ天性類ひ稀ぬ。此法師彼ハ結毘婆婆の義を余

夜叉神蜀賓國の封界を守護と
夜叉
麥波須跋陀羅
夜叉

夜叉
夜叉

國ふ於てこれを弘通せんと欲ふるして。其身を假ふ痴ちる狂人と成て。罽賓國ふ
至り平生ふ大集説法中ふまぢはりて聽聞ちされば狂痴の形勢ふやはらこれば我の
取まろう乖失言語ち并異て通倒をくざれば。衆人これを呼て皆其數ふも入ざう
くる。斯て世を經ること十二年。毘婆娑を聽ちを數回。それ文義已ふ熟しく悉く誦持し
て心中に納ちくべ。本國ふ還らんと欲ふくを去て國境の門ふ至て出んすふ。時ふ
守護したる諸の夜叉神高声ふ唱令くく大阿毘達磨師今國ふ出んと欲ふと
即時ふふくくて大集の中ふ還と。衆人共ふ撿問ちるふ。語紕繆して相領解
せざく衆人一統ふ狂人ちるとふ。即これを放遣る法師後ふ又門を出んとふ諸神
復唱令くて執てくを。遂ふ國王ふ聞えて又大集中ふこれを撿問ちる事
先のごとく更ふ相領解せざる。斯のごとくちるを既ふ三度去てハ復うる終ふ第四
度ふ至て。諸神おろて還ることいへどを衆人重て撿問せざる。諸夜叉をして放遣く
國を出さしむ。法師ハ首尾くく本國ふ還て遠近ふ觸令くて云く。我既ふ罽賓國ふ

至りて毘婆娑を學び得く文義ふ具くくと。能學ぶ者あらば急ぎ来て之を取
へくと。是ふりて四方ちり學徒雲の如くふ集る。年既ふ老衰ふ及れハ此法を説
竟るくを餘命ちりと恐まて諸学者をして急疾ふ之をきくしむ。ちる程ふ隨
て之ふ説出せバ隨て書くく遂ふ全く成就ちるを得う。罽賓國の諸師。
後ふ此法已ふ餘國ふ傳くくと聞て後悔せくぐ
偖て其後多くの星霜を經く。佛滅後九百年中ふ至て頻闍訶婆婆と
いふ外道あり。頻闍訶ハ山の名ちり。婆娑ハ譯くて住とふ。此外道此山ふ住ちる
ふ因く名とす其頻闍訶山の麓の池の中ふ龍王あり。名を毗利婆伽那ちり。
龍王ちく僧佉論を解ち。頻闍訶婆婆かれて龍王毗利婆那の。僧佉論をとく
解ると知る故ふ就て受學せんと欲ち。龍王恒ふ身を變じて仙人の狀貌をすり。葉
屋の中に住と頻闍訶婆婆往く龍王の所ふ至て。其學でんと欲ふ意をはぐる。
龍王即ちを許く。僧佉論の解説ふ説く。頻闍訶婆婆此論を得て外道の法を

傳ふ。夫れ心高く大憍慢なり。此法最大ふして是ふ過ぐる法有べからずと謂。今釋迦の法盛ん世ふ行ひ。衆人此法大なりと尊ぶ。我これを破べしとて。即阿踰闍國ふ入て論義の鼓をうちてつく。我こゝふ論義せんと欲をもつ我負ふ隨ふば當ふ我頭を斬るべし。若彼方負ふ隨ふば彼が頭を切べしと。國王毗訶羅摩阿祇多。譯して正勒日と。王此事を知て即ち頻闍訶婆婆と呼てこれを問。答て云く王はこれ國の主なり。沙門婆羅門をおしいく偏愛の掟有べからず。若習ふ処の行法あんふは宜く其是非を試をみるべし。我今釋迦の弟子と決判せ度候おのく頭をもつて誓をたてべしと奏ぜ。王是をもつたまふ。王人をつかはして國内の諸法師ふ問たまふ。誰かこの外道ふ對して論義をなすもの有や。そもく對をなすべ與ふ論義をべしと命を時ふ摩竟羅他法師。婆藪槃豆法師等の諸大法師は悉く餘國ふ往て在さず。摩竟羅譯して心願をもつて唯婆藪槃豆の師匠なる佛陀密多羅法師

のみ國ふ在せり。此法師本大解をもつとゝ雖も年已ふ老衰して。神情昧弱して。辨說羸微なり。されば見る影をもつて行狀るれども法師のいとく。我法の大將なる者悉く餘國ふ往て存ずと。尒はあれども外道強梁ふして復縱をべからず。我今正ふ應じて外道ふ當るべしと法師即この由を國王ふ奏ぜ。王之を許して日を決。廣く大衆を集論義堂ふおひて外道の頻闍訶婆婆と。佛陀密多羅法師と論義せしむ。外道問て云く沙門は義をもつて欲とす。又義を破せんと欲をもつて。法師答ていはく。我は大海のごとし。容ざるを云所なし。汝は塊の如し。中ふ入れば即沒を。汝がこゝろの望むところふ隨ふべし。外道の云く。ふらば沙門義をもつて立べし。我當ふ汝が破をべしと。法師即無常義を立て云く。一切有為法剎那剎那ふ滅を何を以ての故。後見ざる故ふ種々の道理をもつて之を成就をと。是法師の說所なり。外道一聞て悉く誦じて口ふあり。外道次第ふ道理を以て之を破る。法師をでふ危し。大衆して是を救べし。救得ることを能はざる。法師老邁の故ふ遂ふ負ふ隨ふを。此時外道の云く汝これ

婆羅門種。汝も亦婆羅門種なれば。汝と殺さべし。今汝が背と鞭打て我勝と得
たると頭とべしと。老法師の背ふ鞭と打て。其成敗と行う。王外道と称義しゐひ
三洛沙の金と以て外道ふ賜ふ。外道これと戴きて國中に布散し。一切の人ゑ
施し。稍く頻闍訶山ふ還ることゑる。時ふ此外道大願と発して。山中の窟の中ふ
入。咒術の力ともつて。夜叉神女の稠林と招きくせ此神女ふ後ふて願ふ。
我死して後石と成て。永く毀壊さしめと。神女即ちこれと許諾ふ。さて衆ふ
告ていく若我著ば僧佉論ふ於て。不審の條あべ其趣と石面ふ書べし。
我必文字と以て解説とべしと誓ひつ。自石ともつて窟と閉ぎ。中に於て命と
捨ることゑる。即石と成ぬる。果して其後難問のことあるとべ。石面ふ書て尋ることゑ
即座ふ石面ふ文字とあらはし。返答ともあり
偖て天親ハ阿踰闍國ふ還ると来りて。斯の如きこと聞ひ此外道ふ値ざる事と
憤て。人と遣りて頻闍訶山ふ於て此外道と覓ら。其我慢と折伏して以て師と辱

しめ恥雪んと欲と。然るふ外道ハ既己ふ石と成し由聞ねひ。天親尚も憤とはし。
即ち七十真實論と造て。外道の造る所の僧佉論と破しゐ。其論文と石ふ觸る
ふ石面ふ汗と流し。終ふ微塵の如く砕けて。一句も荅ふる事能ハざ。是ふよりて諸の
外道ふ大ふ憂ひ。我所と害をるもの甚しと。ことごとさる程ふ天親ハ師の為ふ讐
と報ひ恥と雪ぐ事。偏ふ高德のいたる所也と衆人ふ慶快し。國王屢天親の德
と賞し。三洛沙の金と賜ふ。天親此金と三分ふ分ちて。阿踰闍國ふ三寺と建立し。一ふ
北丘尼寺。二ふ薩婆多部寺。三ふ大乘部寺等ゆり。後天親正法ふ成立し。先ふ毘婆
婆の義と學びて既ふ通し。後ふ衆人の為ふ毗婆沙の義ふ講と。一日講ぶれば一偈と作りて。
一日説所の義と摂と。赤銅の鍱ふ刻て此偈と書き。醉象の頭の上ふ標し置。敲ふ
擊ていく。誰人か能此偈の義と破せん。若破ることゑる者あらば當ふ出来るべしと。斯の如く次
第ふ六百余偈と造て毗婆沙の義と摂し。悉く盡せり。皆銅の鍱ふ刻て象の
頭上ふ置ていづれも同じ。ふあるふとれと破ることゑる者ふし。即是俱舎論の偈なり。偈足りて後ふ

五十斤の金を以て此偈と以て罽賓國の諸の毗婆沙師に寄与ふ。彼人々大に歡喜し。我正法已に廣く弘通すと謂へ。但し偈の言略して意味深なれば。盡く解すること能はず。故に又罽賓國の諸師天親に贈る所の五十斤の金を以て五十斤の金と添都合百斤とし。天親に餉へ。偈盡く解し難ければ。長行と造りて此偈の義を詳に解し給へと乞へ。天親これを承諾し。即ち長行と作て偈の義を偈し。薩婆多の義と立てこれを僻所あるとい經部の義と以てこれを破す。名づけて阿毘達磨俱舎論とふ。論全く成て後罽賓國の諸師に寄与す。罽賓の國王正勒日王うやうく敬依すし。太子婆羅祇底也婆羅譯して新と。祇底也譯して日と。此日太子として法師となきと王原未に入りしかるに。天親に就て戒を受しむ。王妃も又出家して天親の弟子となる。太子後に王位に登りぬし。母公と同じく天親と留めて阿踰闍國に住して其供養と受んことを請ぬ。天親即ち之を許。然るに新日王の妹の夫の婆羅門と婆修羅多と名づく。是外道の法師にして毗伽羅論と立て天親の造る俱舎論と破して云く

天親の立る所の論と。我毘伽羅論とは大に相違へり。天親若毘伽羅論を能解せば是と破せよ。若解ること能はずば汝の論と壞るべし。天親の云く我若毘伽羅論と解せんば豈甚深の妙義と解せんや。仍て論を造りて毘伽羅論と破す。三十二品始より末まで悉く皆壞る。是に於て毘伽羅論つゐに唯俱舎論のみ在國王賞して三洛沙の金を天親に賜ふ。王の母公も亦兩洛沙の金を賜ふ。天親此金を分て三分とし。丈夫国と罽賓國と阿踰闍國とに各一寺を建立す。偖又此論壞られし外道の婆修羅多恚憍怠して。如何ともして天親を伏せんと欲るより。使を天竺に遣し僧伽跋陀羅法師に阿踰闍國に来て。論を造て俱舎論と破せんと請。此法師兼引く阿踰闍國に来て。兩論を造る。一に光三摩耶論一万偈あって唯毘婆沙の義を述べ。三摩耶譯して義類とす。二に隨實論十二万偈あり。毘婆沙の義と救て俱舎論を破す。論成て後天親と呼て。更て共に面上にこれを論決せんとす。天親は其破をとゝぐ。俱舎の義を壞ること能はざるを知て。復彼と面上に論決せば。有智人は自ら其是非を知べしと云

天親菩薩
頻闍訶山ホ
師の
恥辱
を雪く
夜叉神女稠林

天親菩薩

抑天親は先に遍く十八部の義に通じて。妙に小乘と解す小乘と執て是と。大乘と信ぜば摩訶衍はこれ佛說に非ずと謂へり茲に又天親の兄なる阿僧伽法師は既に此第の聰明人に過識解深廣にして內外に詠通せるを以て。其論を造りて大乘を破せんことを恐る。阿僧伽は丈夫國に住せり。使を阿踰闍國に遣して天親に告て曰。我今疾篤くして死期に臨る。汝急に來るべし。天親驚き使と倶に道馳て本国に反り。兄阿僧伽に對面して。病の容子を尋ねたまふに。阿僧伽のいはく。我今心に重病あり其病の本は外より來るにあらず。汝よりして發る所なり。天親又問て云くこれなり病の發る所を宣ふこと不審し。其故其に聞せぬと。兄のいはく是別義にあらず。今汝小乘を執し大乘を信ぜば。常に毀謗を生ず。其悪業に依て必永く悪道に淪んで無量の苦を受べし。我それを恒に愁ふ其苦積て既に命全からざるんとす。天親是を聞て大に驚き。即ち兄に願ひて大乘の深意を說きたまへと。阿僧伽其時大乘の要義を懇に說示したまへば天親原來聰明にして殊に深識なる程に此時に於て大乘は理應にして小乘に過ると悟て知て。是より兄阿僧伽に就て遍く大乘の義を學び。後は兄の解の所の如く悉く通達を得て解意既に明らにして。前後を思惟したまふ。悉く理と相應して。乖背する有ることなし。始め覺て若大乘なんば三乘の道果なし。斯まで尊き大乘の法を毀謗して信樂と生ぜば此罪業必悪道に入ることを恐れて。深く自ら其咎を責め。先非を悔て兄の所にまうで數回其愚迷を陳。先の誓を懺悔せんと願ひ。つぶさに如何して免るることを知らん。ぜひて三世の諸佛の言訳に。我昔大乘を謗しもし此舌根の事なれば今此舌を割て其罪を謝せんと宣ふ。兄阿僧伽之を留め。汝今千枚の舌を割てもと。更に誹謗の罪滅ぶべし。其罪を滅せんと欲せば。今まで誂て其舌をもつて直に大乘經を讚あげ普く世に弘通せば。自ら其罪は滅ぶべしとのたまへば。天親實もと心づきぬ。夫よりして大乘を讚じたまひ。阿僧伽法師寂したまひて後。天親方に大乘論を造て。諸の大乘經を解釋し。華嚴涅槃法華。般若維摩勝

鬘等の諸の大乘經論悉く。これ天親の造る所。又唯識釋攝大乘三寶性甘露門等の諸大乘論を作るゆ凡此天親の造るゆ所は。文義精妙にして。見聞するもの信求せざるもなし。故ゆ天竺及び餘の邊土ゆ至るまで。大乘小乘を学ぶ人悉く天親所造の論を以て學本とす。異部および外道論師等。天親の名を聞て畏伏せざる事なしとぞ。阿踰闍國ゆおいて迂化し給ふ年齢八十。迹を凡地ゆ居をとゞめ。理實ゆ思議かゝるを也

付法藏因緣經第六ニ曰。尊者闍夜多臨當滅度。告一比丘名婆修槃陁汝今善聽。昔天人師於無量劫勤修苦行爲上妙法今已滿足刹安衆生我受囑累至心護持今欲委汝當深憶念婆修槃陁白言受教從是以後宣通經藏以多聞力智慧辨才如是功德而自莊嚴善解一切修多羅義分別宣說廣化衆生所應作已便捨命行。

高僧讃嘆鈔云天親菩薩ゆ。說一切有部ゆ於て出家受学し。有部ゆハ佛入滅の後佛弟子二部ゆ分つ。大衆部と上座部とゆ。上座部ハ迦葉と上座と故ゆ十の部師あり。大衆部ゆハ八の部師あり。根本の上座大衆の二部と加て二十部ゆ。今の有部ハ上座部の中の第一ゆ。天親此部ゆ依て出家して。小乘と受學して大乘を誹謗しなゆ。後ゆ元著阿僧伽の許ゆ詣して大乘を習學し。大乘論百余部を作るゆ。其中ゆ淨土論一卷を造るゆ。是を無量壽經優婆提舍願生偈と名ぢて淨土の三經通伸の論ゆ。此論ゆ一心歸命を彰し自ら願生西方し。人を勸て專ら極樂往生を願ハしゆなり。又云天親菩薩ハ釋迦如來像法の中に出世し。一論を說く願生西方し。横超の誓願を彰ハし。他力の一心を示し。世尊我一心歸命盡十方无导光如來願生安樂國を偈頌を造て。人をも勸ゆ自らも報土往生を願ハしなり。

九表記云天親菩薩姉小乘論五百部後ふ大乘論と五百部造りて世ふ弘めふ
合て千部の論を造りの故ふ千部の論主とゝ也。されバ天親菩薩の本意と顕さんと思ひ
ゆへて。往生浄土論を造りなり。扨その浄土論ふ。礼拝門。讃嘆門。作願門。観察門。
廻向門の五念門と釋しなり。此五念門ハ往生浄土の修行なり。然るバ此五念門と釋し
給ふ事。假令五念門の名を知らざるとも若しかず。一念帰命の信心の中ふハ。五念門
も三心も。皆悉く具してあるなりと知らるゝ為ふ浄土論の初ふ。世尊我一心帰命盡十方
无碍光如来願生安楽國と書なり。是の如く一念帰命の信心を勧られたるなり。又曰
天親菩薩自己の智慧まことハ上諸佛の御意ふ叶ひ。下衆生の心ふ叶ひ侍るなり。ふ
成就をべくゝと願ふくハ如来の御心ふ叶ひ。衆生の機ふ應ずるなりに佛力と知て。
此五念門成就をべくゝなり。天親菩薩の心願と釋迦如来ふ告て。如来の神力
を蒙らんが為ふ世尊と呼出して心願を告給ふ也とゝ

三國七高僧傳圖會　天竺之巻終